

## 審査講評 2011 日本ストックホルム青少年水大賞 審査部会長 千賀裕太郎

### 賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞(SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である静岡理工科大学静岡北高等学校科学部水質班は、「巴川水域環境研究～ホテイアオイのつくるバイオループ～」と題して30ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の強い関心呼びましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は、全国13校（関東5校、近畿2校、中国2校、四国2件、九州1校、沖縄1校）、15団体から応募がありました。いずれも高校生らしい身近な水環境を対象にした力作ぞろいの自主研究でした。

### 審査経緯

審査は、5人の委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性（水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性が見られるか）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か）の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査員がそれぞれの専門的見地から行った書面審査の結果を持ちよって審議して、上位4チームを選びました。次にこの4チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」及び「優秀賞」の授賞団体をそれぞれ選定しました。

### 審査結果と授賞理由

2011日本ストックホルム青少年水大賞に輝いたのは、「水環境における外来種問題のネットワーク構築」と題する調査研究を行った、神奈川県伊勢原市にあります向上高等学校生物部（代表：緒方大地、青木景、中島美貴、指導教諭：園原哲司）です。

徹底したフィールドワークを基礎に、相模川における準絶滅危惧種のマシジミを駆逐する外来種タイワンシジミの分布を詳細に調べ、ホタルの幼虫放流という環境保護活動が、その主な原因であることを初めて突き止めました。

さらに、全国的にタイワンシジミに関する情報がきわめて不足している現状をふまえ、同校生物部がキーステーションとなって全国の博物館、内水面試験場などの試験研究機関からタイワンシジミの生息情報と標本を集約し、北海道以外の全ての日本の地域でタイワンシジミがすでに定着していることを明らかにしました。同様の手法を用いてゲンジボタルの餌であるカワニナと競合する外来種コモチカワツボ等の分布域の特定にも大きな成果をあげております。

このように同校生物部は全国の「水辺の外来種の情報センター」としての地位を築きつつあり、今後は全国の夥しい数の高等学校生物部間のネットワークを構築したいと強い意欲を示しています。

こうした外来種問題に挑む地道な調査研究と全国情報ネットワーク構築の活動は高く評価されるものでありと評価し、日本ストックホルム青少年水大賞を授与することとしました。

優秀賞に輝いたのは、『『蘇れ、山口県のオオサンショウウオ』—川の守神オオサンショウウオと人間の共生に関する基礎的研究』と題する調査研究を行った、山口県防府市にある学校法人高川学園中学・高等学校科学部（代表：竹重美咲、隈井光砂、横山爽子、指導教諭：村田実）です。

生きた化石として特別天然記念物に指定されているオオサンショウウオの、山口県での生息分布はほとんど

ど不明で学術的研究も遅れていました。

同校科学部は捕獲した固体にマイクロチップを埋めて固体識別できるようにし、その繁殖等の生息環境の実態を明らかにしました。この成果をもとに、河川整備の望ましいあり方について重要な提言を行い、さらに野生動物を「国宝の仏像」のように扱う環境保護のあり方にも、鋭い疑問を呈しています。

こうした同校の実証的な調査研究と、それをベースにした提言活動は、今後とも河川環境を保全するための総合的な体制整備に大いに寄与すると期待されることから、優秀賞を授与することとしました。

---